

赤十字NEWS

December 2011 Vol.859
http://www.jrc.or.jp

12



編集・発行／日本赤十字社 企画広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。



「冬の寒さに 負けないで！」 若さと笑顔で 被災地を温かく包みます

福島市内の仮設住宅で暮らす福島県浪江町の町民を励まそうと、赤十字奉仕団やボランティアが10月30日、混ぜご飯や豚汁などの炊き出しを行いました。テントの下で懸命に盛り付けを手伝うのは、新潟県の大学生二人と、福島県の中학생一人。「ボランティアは初めてです。人手が少ない中、みなさんの力になって本当によかった」「浪江の人たちに喜んでもらえてうれしいです。機会があればまたやってみたい」と笑顔で語ります。いよいよ厳しい冬が訪れた被災地。仮設住宅で不便な生活を余儀なくされている皆さんの心を温め、明日への希望の灯をともすのは、国内外からの継続的な支援です。

CONTENTS

TOPICS 2

広報特使・藤原紀香さん
福島県で被災者激励
赤十字シンポジウム2011
「東日本大震災の経験を
国際支援に」

TOPICS 3

日本最大級の献血ルーム
オープン
ティファニー協力の
チャリティー写真集
「LOVE&HOPE」
「救急法基礎講習」と
「幼児安全法」がリニューアル
常任理事会開催報告

SPECIAL 4 5

平成23年度 海外たすけあい
たすけあうやさしさが
世界に笑顔を広げます

AREA NEWS 6 7

北海道・神奈川・愛知
兵庫・広島・京都・岩手・宮崎
日本赤十字社所蔵アート展
Voice & プレゼント

WORLD 8

海外赤十字社代表団
被災地を視察
ウクライナ赤十字社社長講演
「チェルノブイリ原発事故と
赤十字の25年」



フリーアナウンサー
渡辺真理さん

つながれば 世界はもっと素敵になる

「多くの方の支えで仕事を続けてきた感謝の気持ちを社会に還元したいという思いがきっかけでした」——メディアで活躍するかたわら、世界の恵まれない子どもたちを支援するNGO「国境なき子どもたち」へ参加するなど社会貢献に取り組んできました。こうした経験を踏まえて、ボランティア活動に注目が集まる震災後をこう語ります。「自分に何ができるのか、悩んだ方も多と思います。もどかしいけれど、この悩む時間がきっと良い方向や結果を生み出してくれる

大切な過程なんだと思います」 「海外たすけあい」募金のキャンペーンとして11月12日に開催された赤十字シンポジウムではコーディネーター役を務めました。「震災で“国内のことで精一杯”という意見もあります。でも、大変な経験をしたからこそ痛みや辛さがより分かるはず。海や陸でつながっている地球上、優しさに国境みたいな境目はないわけですから、こういう時こそ助け合ってつながっていききたいと実感します」

クロスアップひと

PROFILE

1967年6月27日、神奈川県生まれ。国際基督教大学教養学部卒業。1990年にTBSに入社。98年3月退社後は、同年5月よりテレビ朝日系列「ニュースステーション」のキャスターとして出演。現在、TV、ラジオなどを中心に活躍中。

東日本大震災

赤十字広報特使・藤原紀香さん

皆さんのことを

発信し続けていきます

福島県で被災者激励

「赤十字広報特使として、一人の人間として、皆さんのことを発信し続けていきます」。赤十字広報特使で女優の藤原紀香さんが10月29、30日、東日本大震災で被災した福島県を訪れました。紀香さんの被災地訪問は5度目、福島県は2度目です。

今回の目的は、日本赤十字 ト子(85歳)さん夫妻のお宅が仮設住宅や併設の集会所を訪問。「寒くなるので、窓などに配る冬場対策セットに張る断熱シートなどを持ってきてほしい」ととセットを手渡しました。

福島第一原発の事故から避難してきた浪江町の皆さんが、いろいろお世話になって私たちが福島市南矢野目の仮設住宅では、原司一(84歳)・サ

でも、紀香さんにお会いできてこんな嬉しいことはないです。

いつも笑っていることを心がけているというサト子さんですが、紀香さんに肩を抱かれると、震災以降の7カ月間を思い出したのか、泣き出し

近、警戒区域にある自宅に一時帰宅。自動車で背丈ほどの雑草をなぎ倒しながら自宅に入ると、家の中を牛が荒らしていたといひます。

「生きていこうに帰りたい」と思っているけれど、帰れるかどうか。福島だからって差別されるのは、ひどいね。

紀香さんは「風評被害ですよね。でも、全国の人が福島のことを応援しています」と言葉をかけました。

この仮設住宅では、赤十字奉仕団やボランティアが行った炊き出しや、日赤福島県支部による健康教室でリラクゼーションを手伝いながら、入居者の話を傾けました。

また、福島県庁や相馬市役所、相馬市内の仮設住宅も訪問。「風化させてはいけないこと。被災地のことを全国に伝えていきます」と、佐藤雄平県知事や立谷秀清相馬市長、被災した方々に力強く約束しました。



©Ichigo Sugawara

「風評被害を吹き飛ばしましょう」

福島市内で行われた「J.A.まつり」(新ふくしま農協主催)には、サブライズゲストとして参加しました。

来場者から熱烈な歓迎を受けて登壇した紀香さんは、福島県産の米を使ったおにぎりや、くだもの王国・福島が誇るリンゴなどを頬張りながら「おいしいですね」と連発。

「寒さも風評被害も吹き飛ばして、みんなで元氣な福島、明るい福島を全国に発信していきますよ」と呼びかけると、大きな拍手と歓声があがりました。

福島赤十字病院で患者さん激励

福島赤十字病院では、福島第一原発周辺自治体の南相馬市、飯館村、浪江町から避難入院している患者さんらを激励。出産したばかりの赤ちゃんを抱く若いお母さんたちを病室に訪ね、「ごはん、食べられていますか」「風邪を引かないでください」と一人ひとりに声をかけ、手を握って励ましました。

※冬場対策セット
岩手・宮城・福島の3県で配布します。
①窓用の結露防止・断熱効果アップシート(13万枚、仮設住宅全戸対象)
②寝具や座布団の下に敷く除湿・保温効果パッド(10万枚、同)
③電気こたつ十掛け・敷き布団(1800セット、集会所など対象)

海外たすけあいキャンペーン

赤十字シンポジウム2011 「東日本大震災の経験を国際支援に」



「たすけあう世界へ」東日本大震災でつなげていく支援の輪」をテーマにした赤十字シンポジウムが11月12日、東京都内で開かれました。同シンポジウムは海外たすけあいの一環として毎年開催されているもの。震災で全国に広がった支援を継続し、国境を越えた支援へどうつなげていくのかを、4人のパネリストが討論しました。

生きた海外 救援の経験

開かれた今回の震災。パネリストはそれぞれの立場から活動振り返りました。

日赤医療センターの丸山嘉一・国内医療救援部長は「給

者へ寄り添う大切さを訴えました。

今回の震災では24の国や地域などからの救助・医療チームが集まり、世界中から寄付金が寄せられました。柳沢さんは「最貧国の一つ、アフリカのニジェールからも200万円が寄付がありました。こうした貧しい国の人々もできる限りのことをしてくれました」と話します。

一方、「ふんばろう東日本支援プロジェクト」の西條剛央代表は「行政システムを通じた支援には迅速性に問題があった」と指摘します。ネットによる情報交換が必要な物資を直接被災者へ届けてきた活動経験を踏まえて、「行政支援が行き届かない、穴を埋めるのが役割でした」と振り返りました。

復興の要は 生活者の自立

復興へと動き出している被災地。今後の支援のあり方については、国際協力機構(JICA)の柳沢香枝・国際緊急援助隊事務局長が「復旧・復興には被災者の生活の立て直しが不可欠」と訴えます。JICAの海外支援の経験に立ち「就労支援こそ焦点」と課題を提起しました。

「こころのケア」の役割を強調したのは、チェルノブイリ原発事故被災者で現在は日本で活動する音楽家のナターシャ・グジーさん。「少しでも安らぎを感じて欲しい」と避難所での演奏活動を続けています。音楽やスポーツなどでの悲しみを癒すとともに、こころのケア活動が必要」と被災

ナターシャ・グジーさん 悲劇を繰り返させないため、私は歌います

チェルノブイリ原発事故の時、私は6歳。父が原発で働く私たち家族は、原発から3・5キロの場所に住んでいました。

事故は夜中に起きまし。でも、ほとんどの人はそのことを知らされず、次の日は普通に生活していたのです。子どもたちは学校

に行き、母親たちは子どもを1日中外で遊ばせました。そして放射能を浴びたのです。

その次の日、「たいしたことはありませんが念のため、3日で帰れます」と避難させられました。しかし、20年以上が経っても、その町に戻ることはできません。

私に原爆を自分の問題として考えてもらえるきっかけになればと願っています。

福島での生活は、1、2年で終わらないと思います。私がコンサートを通じて体験を語ることで、多くの皆さんに原爆を自分の問題として考えてもらえるきっかけになればと願っています。

援の強化を求めました。

献血しながら絶景を楽しもう!



SF空間をイメージさせる広々とした待合室

日本最大級の献血ルーム

名古屋駅にオープン

広さ、高さとも日本最大規模の献血ルーム「タワーズ20」が10月8日、JR名古屋駅直

ベット数28床でスピーディーな献血を実現

結のJRセントラルタワーズオフィスタワー20階にオープンしました。フロア面積は約952平方メートルと日本一。明るく開放的な休憩室や採血室から眺む地上100メートルからの絶景が楽しめるほか、献血者向けにVOD(映像配信サービス)やWiFi-Fi(インターネット接続サービス)の環境も用意されています。

オープン初日は午後からの受け付けでしたが、2000人以上の人が訪れ、整理券が配られたほど。タワーズ20の大西博幸所長は「眺めを楽しむほかに、献血者の皆さまがゆったりとした気分でご協力いただけるさまざまなサービスをご用意してスタッフ一同お待ちしております。ぜひ一度足をお運びください」と呼びかけています。

「タワーズ20」のオープンを心待ちにしていた岡哲也さん(53歳)は10月26日、記念となる600回目の献血を新ルームで達成しました。16歳だった高校1年の時、地元大分県の学校に献血車が来たことが献血をはじめたきっかけ。昭和63年に名古屋に越してきたからは2週間に1度の成分献血を23年間休むことなく続けてきました。

「人間を救うのは人間。元気な者が弱い者を助けるは当たり前」とその思いはまさに



爽快気分 献血600回!

赤十字人。だからこそ、ときには「若者にもっと献血の機会を増やすべき」と赤十字への注文も忘れません。

新ルームについては「明るく開放的なので気分が晴れる。爽快です」と大満足の岡さん。「600回は通過点。献血定年の69歳まで当然、献血はやり続けます」と力強く決意表明してくれました。

愛と希望を日本へ、被災地へ

ティファニー協力のチャリティー写真集「LOVE & HOPE」

売上金全額が義援金に

綾瀬はるか、沢尻エリカ、浜崎あゆみなどの日本人アーティストとともに、レディ・

「愛と希望を届けた」と笑顔を見せました。

ティファニー写真集「LOVE & HOPE by Lady Gaga supports LOVE & HOPE by Lady Gaga」の売上げの金額1500万円が10月26日、東日本大震災義援金として日本赤十字社に寄せられました。

写真集は、アジアで活躍するフォトグラファーのレスリー・キー氏が「震災後の日本に愛と希望を届けた」と笑顔を見せました。

「愛と希望を届けた」と笑顔を見せました。

「愛と希望を届けた」と笑顔を見せました。

「愛と希望を届けた」と笑顔を見せました。

「愛と希望を届けた」と笑顔を見せました。

「愛と希望を届けた」と笑顔を見せました。

「愛と希望を届けた」と笑顔を見せました。



「愛と希望を届けた」と笑顔を見せました。

「愛と希望を届けた」と笑顔を見せました。

ティファニーと赤十字 95年の歴史の絆

アメリカ赤十字社の本社に飾られているステンドグラスは、ティファニー創業者の息子ルイス・コンフォート・ティファニーが制作し、1917年に設置されたもの。

理念。それに基づいてアメリカ赤十字社との関係が築かれたし、今回の写真集も作られました。日赤とも今後、我々の創造性が生かせるプロジェクトがあれば、協働を進めたい」と話しています。



「救急法基礎講習」と「幼児安全法講習」がリニューアル

より効果的な心肺蘇生に関する国際コンセンサスと国内版ガイドラインの発表を受け、日本赤十字社が行う「救急法基礎講習」と「幼児安全法講習」が12月1日から新しい内容に変わりました。

新しいガイドラインでは、これまで異なっていた成人と小児の「救命の連鎖」が統一され、市民にわかりやすい救命手当の方法が紹介されています。

「救急法基礎講習」では、心肺蘇生の手順が、従来の「気道確保→呼吸の確認→人工呼吸→胸骨圧迫」から、「呼吸をみる(心停止の判断)→胸骨圧迫→気道確保→人工呼吸」に変わりました。胸部と腹部の観察により直ちに心停止を判断し、一刻も早い胸骨圧迫を求める内容になっています。

「幼児安全法講習」では、家庭内で呼吸の障害から心停止にいたることが比較的多い小さな子どもに最適化した「乳幼児の一次救命処置」を取り入れた内容に変わりました。小さな子どもをお持ちの保護者や、日常的に子どもに接することの多い保育士、幼稚園・学校教諭、ライフセーバー、スポーツ指導者に特にお勧めです。

是非これを機会に新しい内容で講習を受講してみませんか。講習の内容や開催予定、申し込み方法など詳細は、左記のナビダイヤルからお近くの都道府県支部までお問い合わせください。

日本赤十字社 人間を救うのは、人間だ。 Together for humanity

AKB48と一緒に もっとよく知る 赤十字!

私たちと、日本赤十字社の活動を学びましょう。

「日本赤十字社×AKB48」スペシャルコンテンツ AKB48からのメッセージ動画公開中!

くわしくはWEBで 赤十字検定 検索 www.jrc.or.jp

常任理事会開催報告

平成23年11月14日、本社において平成23年度第7回の常任理事会が開催されました。審議結果は左記のとおりです。

記

付議事項

- 1 予算の補正について (名古屋第一赤十字病院の立体駐車場の整備にかかる医療施設特別会計歳入歳出予算の補正)
- 2 理事会に付議する事項について (名古屋第二赤十字病院の土地の取得にかかる医療施設

特別会計歳入歳出予算の補正) 審議の結果、予算の補正については、原案のとおり議決されました。

理事会に付議する事項については、原案のとおり理事会に付議することについて了承されました。

また、血漿分画事業の統合、災害救護とボランティア、平成23年度NHK海外たすけあい、東日本大震災国内義援金に関する現況及び予算の補正にかかる10月の社長専決事項の決定状況について報告しました。



1 10月中旬には待望の雨が降ったが、干ばつで草木がない大地に水はしみ込み、洪水被害が発生することもあるという
2 無事生まれた赤ちゃんと日赤の五十嵐真希現地駐在員。赤ちゃんは、五十嵐さんが現地でもらった愛称と同じ「Dansoye (ダンソイエ) (美しい人)」と名付けられた
3 建設中のガルバチューラ県立病院手術室棟。稼働すれば、イシオロの病院まで運ばずとも帝王切開などの手術が可能に



世界から日本へ たすけあうやさしさが 世界に笑顔を広げます

平成23年度 海外たすけあい(12月1日～25日)

世界から日本へ そして日本からも世界へ

たすけあうやさしさが

過酷な地で生きる人々を支援 ケニアの子どもたちを救う地域保健強化事業

ここはケニアの首都ナイロビから北東へ約500キロのガルバチューラ県。この厳しい自然環境の下で暮らす人々の保健衛生環境改善のため、日本赤十字社とケニア赤十字社

は「IHOP」(Integrated Health Outreach Project) 強化事業(通称「愛ホップ」)に平成19年11月から取り組んでいます。この事業の財源は海外たすけあいが支えています。



ナイロビのインターナショナルスクールの児童。日本文化や東日本大震災について勉強中で、「自分のお小遣いから寄付しました」という児童も。ITU KO PAMOJA はスワヒリ語で「私たちは一つです」。

「地域全体が乾燥地帯。砂漠の中に人が住んでいる」といってもいいほどです。地面を数メートル掘るとようやく出てくる地下水も濁っていて清潔とはいえません。この語るには、同事業を視察に訪れた日赤国際部の門倉紀夫さん。こうした水を汲むために数時間歩かなければならない村も珍しくないといえます。

ケニアを含むアフリカ東部を昨年未から襲った干ばつは、1000万人以上が食糧危機に瀕する過去最悪の事態と指摘されています。ここガルバチューラも1年以上にわたり雨から背を向けられてきました。

とはいえ、人々が絶望に沈んでいるわけではありません。「ここに暮らす人々にとって干ばつは日常の出来事。程度の差はあれ、2年に1度程度の頻度で発生してきました。今回の干ばつも、当たり前のこととして受け入れざるを得ない現実があるのです」

しかし、過酷な自然環境は、十分な保健医療サービスとも相まって人々の健康を蝕んでいます。その最大の被害者が子どもたち。ケニアの5歳児未死亡率は出生1000人あたり84人で、これは日本の30倍にも相当します。

「IHOPは、地域保健師と赤十字ボランティアを通じて保健衛生知識の普及や衛生環境の改善などを図り、子どもたちのいのちを救う取り組み。その成果は徐々に形になりつつあります」

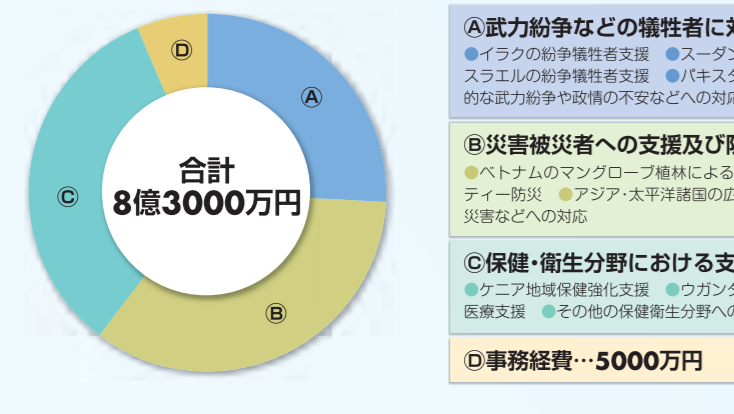
10月初旬、ガルバチューラ北部の村セリチョーを視察に訪れていた門倉さんらのもとへ本の連絡が入りました。「夜中に急に産気づいて、もうすぐ産まれそう」という妊婦からの訴えでした。すぐに村の診療所に連れて行きましたが、大変な難産で明け方になって子どもは産まれません。そこで、手術施設のある隣県のイシオロの病院まで悪路を何時間もかけて運び、帝王切開。無事出産することができました。

「手術をしなければ母子ともに危ないケースでした。自宅出産が伝統の地域ですから、地域保健師や赤十字ボランティアによる、安全な出産のための診療所へ」という妊婦教育が行われなければ、いちは救えなかったか

「IHOPが支援の重点に置くのが人材育成。保健衛生教育や救急法、水と衛生に関するトレーニングを受けた87人の地域保健師と赤十字ボランティアが育成されてきました。事業開始当初から現地で活動する五十嵐真希駐在員は「一人を育てることで、健康や衛生の考え方は確実に地域に根付いていきます」とその意義を語ります。

保健医療施設の機能強化にも取り組む。ガルバチューラ県立病院と保健センターへの医療機材整備や給水設備の設置、同県立病院の手術室建設、医療施設間を結ぶための連絡手段である無線機の整備なども行っています。

平成23年度 海外たすけあいによる事業実施計画



海外たすけあいのメッセージ。全国郵便局及びゆうちょ銀行直営店、銀行などの金融機関で募金。ナビダイヤルで0570-009595。NHK各放送局、最寄りの日本赤十字社の都道府県支部、病院、献血ルームで募金。ホームページでwww.jrc.or.jp。QRコードとNHKロゴも含まれる。

海外から寄せられた励ましのメッセージ。ウガンダの学校から救援金とともに贈られたメッセージ。写真には子どもたちが勉強している様子と「Red Cross Japan 3200000 With love from KISU」のメッセージカードが写っている。

アフリカ東部の干ばつも支援

昭和58年に始まり今年で29回を迎えた「海外たすけあい」に寄せられた寄付金は累計207億円。「緊急救援」と「開発協力」を2つの柱に、紛争や災害の被災者支援、貧困・疾病の解決に向けた支援事業などに活用されてきました。危機に瀕しながらも援助が十分に行き届かない国や地域への支援を行う上で、いまや「海外たすけあい」の寄付金は不可欠な財源となっています。



過去最悪の食糧危機

アフリカ東部の4カ国は、昨年末から過去最悪といわれる干ばつに見舞われました。国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)はケニア赤十字社とエチオピア赤十字社などの取り組みを支援するための緊急アピールを発表。内戦の続くソマリアには赤十字国際委員会(ICRC)が支援を続けています。日赤はこれらに応え、計9700万円を11月までに拠出しました。日赤は同地域への支援として、ケニア赤十字社とともにIHOPに取り組んでいます。この事業に加えて、今年の「海外たすけあい」では、アフリカ東部全体の干ばつ被害を視野に入れた支援も展開していきます。

同プロジェクトは、ケニア東部の町ガリッサに流れるタナ川を灌漑に活用するもの。2010年からスタートしました。すでにバナナやパパイヤ、トマトなどの農作物が収穫できるようになり、乾燥した大地に緑の範囲が少しずつ広がっています。ピーマン生産に従事する20代の男性は「努力すれば生産が増えるし、やりがいがある」と笑顔を見せます。これまでガリッサでは、干ばつに悩まされながらも、豊富な水をたくわえるタナ川の活用がほとんど図られてきませんでした。「遊牧民が多く農業の伝統がないことに加え、川はワニが生息する危険なところという認識があったからです」(門倉さん)ケニア赤十字社では、中長期的な視点での干ばつ対策として、ガリッサを成功例の一つと評価し、事業をさらに拡大していく計画です。

銃弾の音に怯え、災害や貧困で暮らしに希望が持てない——世界には、いのちを輝かせる機会を奪われた人々が大勢います。日本赤十字社とNHKが共同で実施する「海外たすけあい」は、そうした人々へ善意を届ける事業。東日本大震災では世界の人々から数億円の海外救援金が寄せられました。今度は私たちがたすけあう力を示すときです。

DVD 「献血、ありがとう」 子どもたちが 教える献血の大切さ



神奈川 2011.9

「輸血を必要としている患者さんがたくさんいることを、多くの人の心に響く形で伝えたい」と、神奈川県赤十字血液センターはこのほど、輸血を受けた子どもと家族の協力を受けて、DVD『献血、ありがとう』を作成しました。

急性リンパ性白血病や脳腫瘍などを発病して輸血を受けた子どもたちの誕生から闘病、現在に至るまでの写真などでDVDは構成。献血がたくさんの子どものいのちを救い、今も献血を待っている多くの患者さんがいることを伝えながら、「あなたの献血は、誰かのいのちにつながります……」と訴えます。

DVD作成に協力いただいたある家族が、ソーシャル・ネットワーキングサービスのmixi(ミクシィ)で内容を紹介しますと、「感動した!」「泣けた!」「私も献血しよう!」など多くの反響が寄せられました。

バックに流れる曲はアーティスト“ab bank”の歌う『未来のひまわり』。輸血を受けて元気になった子どもたちの笑顔にab bankのメンバーが感動して作ったこの歌も印象的です。

同血液センターのホームページでも視聴可能です。ぜひご覧ください。

(<http://www.jrcs-kanagawa.org/ketueki/topics/201110dvd.htm>)



「献血のおかげで元気になったよ」と笑顔を見せる出演者の一人、ゆうたくん(7歳)。5歳の時に脳腫瘍で26回の輸血を受けました



他の病院のDMATと共同で救護訓練にあたる日赤救護班

悪天候下での 有珠山噴火総合防災訓練



北海道 2011.10.25

最近では1977年と2000年に噴火した有珠山。近隣住民は「いつ噴火してもおかしくない」という気持ちで生活しています。こうした中、有珠山噴火を想定した大規模な総合防災訓練が10月25日、地元自治体をはじめ、伊達赤十字病院など医療機関、自衛隊、警察、消防、多数の住民が参加して行われました。

同病院は有珠山に最も近い病院で、過去2度の噴火災害での救護活動はもとより、東日本大震災では北海道支部から派遣された最初の赤十字救護班として活躍するなど、豊富な救護活動経験を持ちます。今回の訓練に参加したメンバーの大半が東北の被災地で活動しており、「地元の災害時には自分たちの経験を生かしたい」という強い思いを胸に、悪天候の中で泥まみれになって活動しました。

今回の訓練は室蘭市にある二つの災害拠点病院のDMAT(災害派遣医療チーム)と合同で被災者の対応にあたるという、これまでにない取り組み。今後、災害現場では各医療チームの連携が求められていることから、救護班や各DMATがどのような装備を持ち、どんな対応が可能なのかなどを確認する貴重な機会になりました。

青年赤十字奉仕団が企画 大盛況! 「あいち赤十字フェスタ2011」



愛知 2011.11.3

11月3日、名古屋市内にある日赤愛知県支部を会場に「あいち赤十字フェスタ2011~今こそ活かそう、その力!深めよう、その絆」が開かれました。主催は愛知県青年赤十字奉仕団。お互いの絆を強め、赤十字について広く知ってもらう機会にしようと企画されたものです。県内の学生奉仕団や特殊奉仕団、青少年赤十字(JRC)加盟校の生徒がコラボして行う初の試みは、一般参加者が約250人も訪れるなど大いに盛り上がりしました。

炊き出しの豚汁とおにぎりの提供、赤十字クイズラリー、大震災の際の活動紹介など多彩な催しの中で特に参加者の人気を集めたのは、「日赤愛知たんけん隊」。日ごろは目にする事のない災害備蓄倉庫を見学する企画です。地下のひんやりした備蓄倉庫に高く積み上げられた大量の救援物資を見て、参加者は「赤十字はこんな活動をしているんだ」「災害備蓄倉庫はすごい!」と驚い



メンバーが炊き出しの手順を説明するコーナーも設けられました様子でした。

今回のイベントによって、多くの地域の皆さんに赤十字活動を知っていただくとともに、これまで交流が少なかった奉仕団同士やJRCメンバーらとの連携を強めることができました。

Sports スポーツとコラボ

1万3000人のサポーターに献血呼びかけ——ヴィッセル神戸が協力



モーヴィと一緒に献血を呼びかけるけんけつちゃん

兵庫 2011.10.15

兵庫県赤十字血液センターは10月15日、サッカーJ1ヴィッセル神戸の協力のもと、対清水エスパルス戦が行われたホームスタジアム神戸で献血啓発活動を行いました。これは血液不足が懸念される冬場を前に、多くのサッカーファンに献血の大切さを知ってもらおうと催されたものです。

試合開始前、けんけつちゃんがスタジアムの外でティッシュを配りながら献血の協力を呼びかけました。子どもたちが「けんけつちゃんや〜」と飛びついたり、相手チームのサポーターが「さっき献血してきたよ」と話しかけてくるなど、評判

は上々。フェアプレイフラッグの入場にも同行しました。

ハーフタイムには、大型スクリーンにヴィッセル神戸の主力選手が登場する献血応援CMが映し出される中、チームマスコットのモーヴィとけんけつちゃんが「トモニコウ、献血へ。」と書かれた横断幕を持った日赤職員とともにピッチサイドを歩き、1万3000人の大観衆に献血への協力を呼びかけました。

同血液センターとヴィッセル神戸のコラボは昨年から。これをきっかけにチーム内では選手やスタッフの間で献血への意識が高まっています。

JRCメンバーが 車いすバスケットで交流



少年漫画にも取り上げられ注目を集める車いすバスケット



京都 2011.10.8

「難しいと思っていた車いすバスケットだけど、体験していくうちにどんどんできるようになりました」——京都市地区JRC指導者協議会は10月8日、車いす体験教室を市内体育館で実施しました。障害者との交流を通じて、理解を深めていくことが目的。JRC加盟小学校10校から54人の児童と教師、保護者など87人が参加し、車いすバスケットボールチーム「京都アップス」の選手との交流を楽しみました。

最初はぎこちない車いす操作の児童たちでしたが、車いすバスケットの試合でメンバーのシュートが決まったときには全員から大きな歓声が上がりました。

奉仕団と JRC園児メンバー 歌とダンスで交流会



集めた1円玉募金を手に活動発表



宮崎 2011.11.1

延岡市赤十字奉仕団と延岡市内保育園の交流会が11月1日、延岡市社会福祉センターで開催されました。世代間交流を目的に平成21年度に始まり今年で3回目。JRCに加盟する4つの保育園の園児101人と先生12人、奉仕団員26人が参加しました。

4園合同による「こども赤十字の歌」斉唱と「こども赤十字誓いのことば」に引き続き、各保育園は園児が取り組む1円玉募金などの活動を報告。「のべおか天下一新能」への参加や郷土の歌人若山牧水の短歌を伝える活動を行っている保育園の園児からは、舞や歌も披露されました。

世界に届け「友好の風船」 JRC大会で 180人が交流



どこまで飛ぶかな？ どんな人が拾うだろう——思いもふくらみます



広島 2011.10.22

平成23年度青少年赤十字（JRC）広島県大会が10月22日、日本赤十字広島看護大学（廿日市市）の大学祭会場で開催され、JRC加盟校の園児・児童や生徒、教職員など約180人が参加しました。

大会はJRC加盟校の相互交流と活動の充実を図るのが目的。61回目を迎えた今年は、「広島・韓国青少年赤十字相互交流事業」に参加したメンバーによる体験発表のほか、参加各校の代表者が学校やJRC活動の様子を個性豊かに紹介しました。大会の締めくくりには、参加者全員が思い思いのメッセージと花の種を付けた「友好の風船」を空に放ちました。

赤十字ふれあい フェスティバル 被災地での活動を紹介



子ども用赤十字看護服や看護実習衣の試着コーナーも大盛況



岩手 2011.10.29

「第11回赤十字ふれあいフェスティバル」が10月29日、一関市総合体育館で開催されました。三陸沿岸部が東日本大震災で大被害を受け、その復興・生活再建が進む中で開かれた今年のフェスティバル。AED講習や炊出し試食コーナーなど、恒例となっている赤十字普及の企画に加えて、県内被災地での日本赤十字社の活動を写真パネルにまとめ展示しました。

来場者からは「新聞やニュースで知っていたつもりだったが、改めてこの災害での赤十字の活動が分かりました」「赤十字は多くの地域で救護などさまざまな活動をしているんですね」など数多くの声が寄せられました。

Voice&プレゼント

使ってみた寄付金付き自販機 小西夏江（埼玉県草加市）

社協の研修会で千葉県支部の「義肢製作所」を見学しました。支部にあった「寄付金付き自販機」はすばらしいですね。私も民生委員として募金活動をしています。早速寄付させていただきました。

プレゼント応募方法

CroKumaメモ帳とクリアファイルをセットにして3名様にプレゼントします。

- ①お名前（匿名ご希望の場合はその旨もご記入ください）
- ②郵便番号・ご住所
- ③電話番号
- ④年齢
- ⑤赤十字新聞12月号を手にされた場所（例/〇〇献血ルーム）
- ⑥赤十字新聞へのご意見・ご感想や、扱ってほしいテーマなど

応募先

ハガキ/〒105-8521
東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 企画広報室
赤十字新聞12月号プレゼント係
FAX/03-3432-5507
メール/koho@jrc.or.jp
(件名「赤十字新聞12月号プレゼント係」)

●応募締切/12月26日（月）必着

※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。



(株日赤サービス提供)



facebook に日赤公式ページができました。東日本大震災での取り組みをはじめ、とっさの手当てや献血のこと、国内外の活動現場の写真など赤十字ならではの最新情報を発信していきますので、ぜひご覧ください！
<http://www.facebook.com/japaneseredcross>

東日本大震災チャリティー企画

日本赤十字社所蔵アート展



2012年1月7日～2月19日開催

日本赤十字社が所蔵する美術品を一般公開する展示会「日本赤十字社所蔵アート展 東郷青児、梅原龍三郎からピカソまで——復興への想いをひとつにして——」が2012年1月7日から東京・新宿の損保ジャパン東郷青児美術館で開催されます。

戦前戦後を通じ、日赤には多くの芸術家から絵画や彫刻、陶芸などの美術品が寄贈されています。特に、現在の日赤本社ビル竣工の際には、戦後を代表する重鎮たちによる作品が数多く寄せられました。今回展示されるのは、約100点に及ぶ所蔵品から、絵画を中心に選ばれた約60点です。

展示会収入（観覧料）は、東日本大震災の義援金として日赤を通じて、被災者の生活再建に役立てられます。

会 期：2012年1月7日（土）～2月19日（日）
場 所：損保ジャパン東郷青児美術館（東京都新宿区1-26-1）
主 催：損保ジャパン東郷青児美術館
協 賛：損保ジャパン
協 力：日本赤十字社
観覧料：一般=500円
大学・高校生=300円
中学生以下=無料
(20名以上の団体は各100円引き)



復興への想いをひとつにして

日本赤十字社所蔵アート展

2012年1月7日(土) → 2月19日(日)

損保ジャパン東郷青児美術館



海外赤十字社代表団が被災地を視察 住民に寄り添う活動を評価

「私たち赤十字からの支援が助けになったのであれば嬉しい」——東日本大震災の被災者支援へ寄せられた海外救援金は530億円。世界中の市民の善意が各国赤十字社を通じて届けられたものです。この海外救援金を基に日本赤十字社が進める支援活動の視察へ、海外赤十字社の代表者ら25人がこのほど来日。岩手県内被災地を訪問するとともに、日赤の活動について評価・課題提起を行いました。

災害対応ボランティア強化などに課題

多数の海外赤十字社を招いての視察は5月に次いで2回目です。欧米やアジアなどから11カ国・地域の赤十字と国際赤十字の代表者が参加しました。

日赤本社で10月31日に行われた会議では、東日本大震災評価チームのリーダーである国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)のジェリー・タルボット氏が「医療活動やこころのケアは、効果的で被災地ニーズに応えられていた」と評価。その一方、「IFRCの持つERU(緊急対応ユニット)の有効活用」「災害対応ボランティア強化」などの課題を指摘しました。

また世界の赤十字社が考えるべき事項として同氏は「災害前の対応策が大切で、

大槌町を視察する海外赤十字社の代表ら



IFRC本部や姉妹社との間での支援受け入れ協定も必要。原子力災害時に赤十字が担う役割について検討しておくべきだ」などと問題提起しました。

住民に浸透している日赤の活動

「仕事はどうしていますか?」「仮設住宅にはいつまで住めるのですか?」

11月1日に岩手県宮古市と大槌町を訪れた視察団は被災者に次々と質問。仮設住宅や集会場の内部も見学しました。

この日は住民同士の交流や健康づくりの場として日赤奉仕団員が取り組むノルディックウォーキング講座が宮古市中里団地の仮設住宅周辺で開催されました(写真右上)。被災者12人とともに視察団もウォーキングに参加。オーストラリア赤十字社のドナ・マクスミングさんは「赤十字が被災者のそばで活動している様子を見る事ができた」と笑顔を見せました。

大槌町では、日赤が支援する高齢者サポートセンター「和野っこハウス」(集会場)や隣接する仮設住宅を訪問し



ノルディックウォーキングは、歩きながら会話することもできるので、健康維持だけでなくコミュニケーション作りの機会にもなります

ました。この仮設住宅では一人暮らしの高齢者世帯の玄関に黄色い旗が掲げられています。ドイツ赤十字社のマリナ・ホバンスイェンさんは「こういうシステムでお互いを助け合っているんですね」。

視察終了後、参加メンバーからは「日

赤の活動が住民に浸透していることが分かった」といった感想が出されました。視察内容はそれぞれの赤十字社を通じて、寄付を寄せた各国市民へフィードバックされることが期待されています。

役場職員の頑張りに賛辞

視察団の中には、震災直後の3月16日から3日間、国際赤十字の先遣隊として大槌町など被災地へ入ったIFRC東アジア地域代表のマーティン・ファーラー氏らのメンバーもいます。今回の視察では、3月訪問時に会った大槌町の平野公三総務課長と再会する場面もありました。

役場訪問した視察団を前に、碓川豊町長に続いて挨拶した平野氏は、赤十字への感謝を述べる一方で、津波で仲

間を失った悲しみや、自ら被災しながら支援する側に回らなければならなかった職員の苦悩などを吐露しました。震災後の険しい道のりを聞いたファーラー氏は「私たちは3月のあの後、被災地を離れたが、ずっとここで頑張られてこられた皆さんは本当に素晴らしい。今日、改善された状況を見て心から嬉しい」と目に涙を浮かべながら賛辞を送り、今後の継続した支援を誓いました。

ウクライナ赤十字社社長が講演 チェルノブイリ原発事故と赤十字の25年

史上最悪の原発事故といわれた旧ソ連邦のチェルノブイリ原発事故から、今年は25周年。このほど来日したウクライナ赤十字社のイワン・ウシチェンコ社長が11月2日、今も続けられる被災者に対する支援活動について、日赤本社で講演しました。

秘密にされた史上最悪の事故

1986年4月26日に発生した事故では、原子炉の炉心融解と爆発によって大量の放射線が大気中に放出されました。これにより、現在のウクライナ、ベラルーシ、ロシアの国土が広範囲にわたって汚染され、約336万人が被災。16万人が移住を余儀なくされ、今も原発から30キロ圏内での居住は禁止されています。損害は25年間で2000億米ドルに上るとみられます。

ソ連政府は当初、事故を内外に公表せず、秘密裏に事故処理にあたりました。このため、「何が起きているかわれわれには正確な情報が伝えられず、何から手をつければいいのかも誰も分かりませんでした」(ウシチェンコ社長)。さら

に、ソ連赤十字社も事故後2年間は外国に支援を求めませんでした。

「情報公開と外国からの支援があれば、犠牲者はもっと少なかったはず。非常に心が痛みます」

こうした困難の中、ウクライナ赤十字社はスタッフやボランティアを動員して、住民の避難や安全な食糧の配給、衛生教育などにあたるとともに、同年開かれた赤十字・赤新月社国際会議でウシチェンコ社長が被災者への人道支援を国際社会に訴えました。

年々増加するがん発症例

1990年、国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)は事故の影響や住民の健康などに関する調査を実施。その結果を受けて、IFRCと被災国赤十字社が中心となり「チ

ェルノブイリ人道支援事業」(CHARP)が開始されました。以来、本事業には、日赤を含む各国赤十字社が資金を拠出してきました。

事業の主な活動は3台の移動診察車による住民の健康診断や、子どもたちへのマルチビタミン剤配給、被災者に対するこころのケアなど。特に移動診察車による健康診断では、年間合計4万5000人以上を検査しています。この結果、10年間で440人に甲状腺がんが見つかりました。最も危ぐされるのは、事故当時子どもだった世代への影響です。

「甲状腺がんや乳がんの症例は年々増加しており、2020年ごろに発症が顕著になるという専門家もいます。また、この原発周辺に住んでいた幼児の3分の1が将来、甲状腺がんを発症する可能性があるとの報告もあります」

国連の推計によると500万人が汚染地域に居住していますが、事故による健康被害についての研究は、なお不十分のままです。

原子力災害と赤十字

日赤はこの間、募金キャンペーンを展開するとともに、被災児童や医師を日本に招いて健診や研修などを実施、現地での医療支援も行いました。人道支援事業への資金拠出は現在も継続しています。



社長就任直後にチェルノブイリ原発事故に直面し、以後25年にわたり原発事故に取り組んできたウシチェンコ社長。「東日本大震災で被災された方々の困難が一日も早く克服されることを願っています」

2011年4月、ウクライナの首都キエフで開かれた「チェルノブイリ25周年国際会議」で、IFRCは今も続く被災者への支援に国際社会の注目を喚起しました。11月にスイスのジュネーブで開かれたIFRC総会でも、チェルノブイリや今年の東日本大震災での教訓を踏まえ、原子力災害における赤十字の取り組みについて議論されました。